

播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖
☎079(435)5000



▲ヒコの生家スケッチ (THE NARRATIVE OF JAPANESE より)

エピソード 参

「新聞」誕生秘話①—母の死が彦の運命を変える

江戸時代の終わり、鎖国で海外に行くことなど思いもつかない時代に、アメリカへ渡った人物の幼少期のお話です。その人は「浜田彦蔵(幼名彦太郎)」といい、天保8(1837)年8月21日(9月20日)、播磨国加古郡古宮村(播磨町古宮)に生まれました。のちに、「新聞の父」として知られるジョセフ・ヒコです。

彦が生まれた年は、天保の大飢饉の最中で、食べ物もなく暴動がよく起こり、刺々しい空気がただよっていました。彦の家は、大きなかやぶきの家で倉があり、庭に立派な夫婦松と石燈籠のある村でも豊かな家でした。父親は、働き者で無理がたたったのか、彦の満1歳の誕生を祝うと死んでしまいます。母親は、幼い彦を抱えて途方にくれますが、数年後、彦を連れて隣村「浜田」の吉左衛門と再婚します。吉左衛門は、江戸まで荷を運んでいたのが留守がちでした。母親は、彦を寺子屋に通わせ、教養と躾を身につけさせました。

一方、彦は、幼い頃から浜辺に出て遊ぶことが好きで、海で泳いだり松林で遊んだりしていました。父親が帰ってきた日は、江戸の話をしげみ、

目を輝かせて聞いていました。彦は、船乗りになりたいと母親に何度も許しを請いましたが、危険な船乗りになることだけは反対され、仕方なく商売の道を選びます。

彦が13歳の春、船乗りになっていた兄の宇之吉は、母親を説得し、彦と金比羅参りに出かけます。すぐ帰ってくると思っていた母親は、彦の帰りを一日千秋の思いで待ち続けました。彦が帰ってきたのは、2カ月近くたってからでした。彦の無事な姿をみた母親は、心労から突然脳出血で倒れ、4日目にこの世を去ってしまいました。

航海で母親の死に立ち会えなかった父親は、家に百日閉じこもりその死を悲しみました。喪があけた父親は、彦に「家において寺子屋に通うか、江戸へ旅に出るか」と尋ねました。彦は、母親が亡くなったこともあり、江戸へ連れて行ってほしいと頼みました。数日後、期待に胸をふくらませ、兵庫の港から船に乗り込む彦の姿がありました。江戸からの帰りに遭難し、自分の運命を大きく変える船旅になるとは知るよしもありませんでした。「海外新聞」発行まで、あと14年です。

町の人口 5月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)
34,428人(+75人) 男…16,901人(+41人) 世帯数…13,802(+60)
女…17,527人(+34人)